

住宅街を流れる人工水路で生育するチトセバイカモ

北斗市 長谷 昭

はじめに

函館市に隣接する北斗市は、準工業都市の上磯町と、農業を主産業とする大野町が合併して誕生した人口44,519人(2022年9月30日時点)の市である。特に旧上磯町は、東日本最大規模と言われるセメント工場が立地しており、その工場に原料を供給するやはり東日本屈指とされる石灰石鉱山が郊外にあり、この地域の主要産業となっている。

筆者はその大工場と鉱山を展望する旧上磯町の住宅街を流れる人工水路(規模が小さいので「溝渠」とした方が正確と思われる)に、キンポウゲ科のバイカモ類が繁茂していることに気が付いた。地元の住民にとっては見慣れた光景のようであったので、かなり以前から生育していたと思われる。

バイカモ *Ranunculus nipponicus* Nakai var. *submersus* H.Hara は市販もされているが栽培が困難であるとされるので、もてあました購入者が水路に捨てたところ、たまたま環境が合ったために定着して繁殖していると推定したが、念のために採集して同定したところ、チトセバイカモ *Ranunculus yezoensis* Nakai であった。

チトセバイカモは道央及び道東の一部と、東北地方北部に局地的に分布する絶滅危惧種(絶滅危惧IB類、角野2014、門田2016)であり、道南

では旧恵山町(現函館市)の女那川地区での分布が知られているが、北斗市及びその周辺での分布は報告されていない(五十嵐2016)。

本稿では、住宅街を流れる人工水路に生育するチトセバイカモの同定結果とその生育環境を報告し、その由来を考察する。

チトセバイカモの同定

チトセバイカモはバイカモより小型であり、花床や雌蕊、瘦果及び苞葉に毛がないことが特徴とされる(角野2014、門田2016、梅沢2018)。図1に花及び苞葉を示した。花冠は径1.0cm前後(図1A)、花弁は長さが5mm、幅2.5mm程度、がく片は長さが3mm、幅1.5mm程度、花床や雌蕊及び瘦果には毛は認められなかった(図1B)。また透明な苞葉にも毛がなかった(図

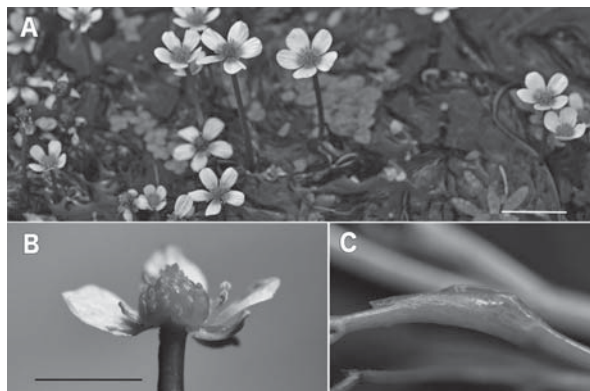


図1 水路に生育するチトセバイカモと花および苞葉の拡大 A: 水流が穏やかな水面に咲くチトセバイカモ。楕円形の葉はミズハコベ。スケールバーは1cm。B: 花の拡大。花床や雌蕊及び発達中の瘦果が見やすいように花弁とがく片の一部を除去。スケールバーは5mm。C: 透明な苞葉の拡大。Aは2022年7月6日、Bは2022年10月13日、Cは2021年9月23日撮影